

2006年度 森基金 研究成果報告書

政策メディア研究科環境デザイン・ガバナンス

岡田 真弓

1. 研究テーマ 「中近東～アフリカ地域におけるキリスト教教会堂の保護・活用の運用モデル構築」

2. 研究概要

建築遺産、特に考古遺跡の保存とその活用法を、遺産を所有する地域の経済的、文化的発展に結びつくような運営の道筋を探る事を前提とし、修士課程一年目では、中近東から紅海沿岸のアフリカ地域におけるキリスト教教会堂の保存・修復・活用の運用モデル構築に焦点を当てた。

3. 活動報告

① 現地調査

イスラエル：2006年7月16日～7月31日

ヨルダン：2006年8月1日～8月9日

調査内容：イスラエルではガリラヤ湖畔に位置するヒッポス遺跡の発掘プロジェクトにボランティアとして参加し、遺構内から発掘された基壇の修復作業に携わる。ヨルダン・ウムカイス遺跡では国土館大学が JICA と共同で行っている戦後イラク復興支援プロジェクトの一環である発掘調査と現地研修を視察する。

② 発表

(1) 中世建築研究会

「イスラエル国における遺跡保存の修復活動—ヒッポス遺跡を事例として—」

(2006年9月2日 於慶応義塾大学)

(2) イスラエル考古学研究会

「イスラエル国における遺跡保存の修復活動—ヒッポス遺跡を事例として—」

(2006年10月7日 於同志社大学)

③発表内容（研究成果）

2006年夏、ハイファ大学率いる発掘調査にボランティアとして参加した際、数日前に発掘された基壇と思われる発掘遺構の保存・修復作業を手伝う機会を得た。

ヒッポスで経験した発掘と同時に行われた保存・修復作業の紹介、そこから見る発掘プロジェクトの課題、について考察した結果、以下の小結に至った。発掘作業はある意味で破壊行為であり、更に地上に表出した遺跡はその瞬間から劣化の速度が速まるので、今後の研究調査や安全性の為に発掘と同時進行の仮補強や修復作業が必要とされる。しかしイスラエル国は考古遺跡と政治や国民の歴史観、更には観光産業を含む国外へのアピール等が複雑に結びついており、その考古遺跡の行く末は単純に学術のみに帰依しない場合がある。「何」の為に、「何」を残すのか、「誰」がそれらの決定を行うのか。今後も、その遺跡の地域社会、歴史、地勢、経済、政治、における位置づけを踏まえた上で遺跡の埋め戻し、修復、活用も踏まえた未来を、きちんと発掘プロジェクトに組み込んだ在り方を考えて行きたい。

③ 国際会議

③-1. エチオピア文化遺産会議 (2007年4月12日、13日開催予定)

現在、三宅理一教授を中心として、ティグレ州の州都メケレの国立メケレ大学内に、2007年春より工学部に付置して「遺産保護コース」(School of Heritage Conservation)を開設する準備が進められている。これまで実質的にエチオピアに存在しなかった歴史遺産保護のための専門家の育成を目的とし、特に現場に張り付いて住民とともに遺産の問題を社会プログラム化し、計画的・技術的に問題解決をはかり、コミュニティ開発、遺産マネージメント、建築工法技術など、多岐にわたった領域をカバーする。本コース開設を機に、エチオピアにおける歴史遺産の価値をわが国を含む国際世界に訴え、そのかけがえのない遺産の保護と活用を広く考えるために、2007年春に東京において「エチオピア歴史遺産会議」を開催する予定であり、現在その準備を行っている。エチオピアから専門家、行政官、政策決定者を招き、日本側からは文化遺産、都市計画、社会教育、エチオピアの現状に詳しい専門家が集まり、アフリカにおける歴史遺産の問題を幅広い観点から議論することを目的とする。

③-2. 日本ナイル・エチオピア学会大会 (2007年4月14日、15日開催)

上記のエチオピア文化遺産会議と併催して、日本ナイル・エチオピア学会が同月14日、15日にわたって、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスにて行われる予定であり、三宅理一先生を中心とした実行委員会が準備を進めている。本学会は、特に「環境」を切り口に第一日目の基調講演と研究シンポジウムを行う。エチオピアにおける遺産保護の責任者ジャラ・ハイレマリアム氏とともに、都市計画の専門家でありつつ駐日スーダン大使として活躍されてこられたムーサー・ムハンマド・オマル・サイード氏による基調講演をいただいた後、「環境から見るナイル・

エチオピア」をめぐって考古学、建築、生態系、情報の専門家によるパネル・ディスカッションを予定している。また、第二日目は、総会とともに会員の皆様による研究発表を予定しており、ナイル・エチオピアの諸問題をめぐる研究成果を発表いただくとともに、会員相互の交流を深めていただくことが目的である。

4. 今後の研究

2の実地踏査と3のシンポジウムにより中近東から紅海沿岸にかけての地域における保存修復の概観を捉えることが出来た。二年時も引き続き、シンポジウム、文献資料、および現地調査の手段を用いて、本地域における教会堂保存と活用が、政治的、経済的、歴史的にどのように関係しているのか研究していく。